

## 国立民族学博物館研究報告 vol.8-2; 表紙, 目次ほか

雑誌名	国立民族学博物館研究報告
巻	8
号	2
発行年	1983-08-31
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10502/00009241">http://hdl.handle.net/10502/00009241</a>

1983・6 8<sub>卷</sub>2<sub>号</sub>

# 国立民族学博物館 研究報告

● 部族社会における近代政治の過程——畑中幸子

中部日本白山麓住民の季節的放浪慣行  
——牛首地区の事例を中心に——千葉徳爾，三枝幸裕

会話場面における人の概念の類型論 (II)  
——その類型と類型の世界的分布——吉田集而

ウラル語族における等位表現の類型——庄司博史

ベリンジアからみた新大陸文化起源の諸問題——小谷凱宣



国立民族学博物館

〒565 大阪府吹田市千里 万博公園 TEL. 06-876-2151

# 国立民族学博物館研究報告

8 卷 2 号

1983年6月

## 目 次

部族社会における近代政治の過程 .....	畑中 幸子.....	197
中部日本白山麓住民の季節的放浪慣行 ——牛首地区の事例を中心に—— .....	千葉 徳爾..... 三枝 幸裕	253
会話場面における人の概念の類型論 (II) ——その類型と類型の世界的分布—— .....	吉田 集而.....	307
ウラル語族における等位表現の類型 .....	庄司 博史.....	424
ベリンジアからみた新大陸文化起源の諸問題 .....	小谷 凱宣.....	489
彙 報 .....		521
国立民族学博物館研究報告寄稿要項 .....		527
国立民族学博物館研究報告執筆要領 .....		528

BULLETIN OF THE NATIONAL MUSEUM OF ETHNOLOGY

---

Vol. 8 No. 2

June 1983

---

HATANAKA, Sachiko	Political Process in Stateless Societies of the New Guinea Highlands .....	197
CHIBA, Tokuji SAIGUSA, Yukihiro	Seasonal or Habitual Movement of Swidden Cultivators in the Uplands Surrounding Mt. Hakusan, Central Japan .....	253
YOSHIDA, Shuji	Typology of Person Category in Deixis (II) —The Types of Person Category and It's Distribution in the World—.....	307
SHOJI, Hiroshi	Typology of Coordination in the Uralic Languages .....	424
KOTANI, Yoshinobu	Problems of New World cultural origins as seen from Beringia .....	489

彙 報

(昭和58年1月～  
昭和58年3月)

人事異動

(教育職) (昇任)

1月1日 京都大学助教授情報解析センター  
一 八村廣三郎(第五研究部助手)

(配置換)

3月16日 第五研究部助手 久保正敏(京  
都大学助手工学部)

(辞職)

3月31日 明治大学講師政治経済学部 大  
胡修(第一研究部助手)

評議員

氏名	任期
石井 良助	(57. 9.15～59. 9.14)
市古 貞次	(57. 9.15～59. 9.14)
伊地智善継	(57. 9.15～59. 9.14)
井上 光貞	(57. 9.15～58. 2.27死去)
岡本 道雄	(57. 9.15～59. 9.14)
木田 宏	(59. 9.15～59. 9.14)
北村 甫	(57. 9.15～59. 9.14)
窪 徳忠	(57. 9.15～59. 9.14)
久山 康	(57. 9.15～59. 9.14)
斎藤 正	(57. 9.15～59. 9.14)
沢田 敏男	(57. 9.15～59. 9.14)
鈴木 尚	(57. 9.15～59. 9.14)
直江 広治	(57. 9.15～59. 9.14)
中尾 佐助	(57. 9.15～59. 9.14)
林屋辰三郎	(57. 9.15～59. 9.14)
馬淵 東一	(57. 9.15～59. 9.14)
向坊 隆	(57. 9.15～59. 9.14)
山村 雄一	(57. 9.15～59. 9.14)
山本 達郎	(57. 9.15～59. 9.14)

シンポジウム

◎「日本民族文化の源流の比較研究シンポジ  
ウムⅣ—すまい—」

日時 昭和58年1月19日(水)—22日(土)

場所 国立民族学博物館

摘要 このシンポジウムは特別研究「日本

民族文化の源流の比較研究」の一環と  
して開催された。

今年度は、「すまい」をとりあげ、  
日本および周辺諸民族の文化における  
「すまい」の問題を、いろいろな研究  
領域から多角的に考察して問題点を探  
った。

シンポジウム委員会

杉本 尚次	国立民族学博物館第四研究 (委員長) 部教授
大塚 和義	国立民族学博物館第一研究 部助教授
秋道 智彌	国立民族学博物館第二研究 部助手
宮本 勝	国立民族学博物館第二研究 部助手
石毛 直道	国立民族学博物館第四研究 部助教授
渡瀬 勉	国立民族学博物館管理部庶 務課共同利用係
藤岡 久子	「日本民族文化の源流」事 務局

参加者

1. 報告者

石野 博信	橿原考古学研究所
太田 邦夫	東洋大学
小川 徹	駒沢大学
杉本 尚次	国立民族学博物館
田中 淡	京都大学人文科学研究所
野村 孝文	九州産業大学
宮澤 智士	文化庁建造物課
渡辺 仁	北海道大学

2. コメンテーター

青山 賢信	大阪工業大学
太田 邦夫	東洋大学
大塚 和義	国立民族学博物館
大林 太良	東京大学
小野 忠熙	広島大学
周 達生	国立民族学博物館
近森 正	慶応大学

鶴藤 鹿忠 川崎医療短期大学  
張 保雄 全南大学校  
Gaudenz DOMENIG スイス国立工科

大学  
金 宅圭 嶺南大学校  
尹 張燮 ソウル大学校

3. 討論参加者

浅川 滋男 京都大学  
安藤 邦広 筑波大学  
石毛 直道 国立民族学博物館  
乾 尚彦 北海道工業大学  
梅棹 忠夫 国立民族学博物館  
川島 宙次 元大林組, 画家  
小林 繁樹 財団法人リトルワールド  
佐々木高明 国立民族学博物館  
杉藤 重信 甲南大学  
関根 康正 学習院女子短期大学  
八木 幸二 東京工業大学  
吉田 靖 奈良国立文化財研究所  
J. PEZEU-MASSABUAU アテネ・フランセ

日 程

1月19日(水)

14:00 (座長:佐々木高明)  
館長挨拶 梅棹 忠夫  
14:10  
問題提起 杉本 尚次  
14:50  
日本民家の型式とその系譜 小川 徹  
コメント 鶴藤 鹿忠

1月20日(木)

10:00 (座長:杉本 尚次)  
分棟型民家は南方系か 宮澤 智士  
コメント 青山 賢信  
13:00 (座長:近森 正)  
日本古代住居の地域性 石野 博信  
コメント 小野 忠熙  
15:30 (座長:関根 康正)  
東南アジアのすまい  
——その形態と技術の伝統——  
太田 邦夫  
コメント G. DOMENIG

1月21日(金)

10:00 (座長:石毛 直道)  
オセアニアのすまい  
——分布を中心として——  
杉本 尚次  
コメント 近森 正  
13:00 (座長:鶴藤 鹿忠)

朝鮮半島のすまい  
——日本との比較を含めて——  
野村 孝文  
コメント  
張 保雄  
尹 張燮  
金 宅圭

15:30 (座長:青山 賢信)  
中国住宅の類型 田中 淡  
コメント 周 達生

1月22日(土)

10:00 (座長:大林 太良)  
狩猟採集民の住居  
——北方民を中心として——  
渡辺 仁  
コメント 大塚 和義  
13:00 (座長:杉本 尚次)  
総括討論 大林 太良  
太田 邦夫

◎「現代日本文化における伝統と変容—暮らしの美意識—」

日 時 昭和58年2月8日(火)—10日(木)  
場 所 国立民族学博物館

摘 要 このシンポジウムは特別研究「現代日本文化における伝統と変容」の一環として開催された。

国立民族学博物館では特別研究として、昭和56年度より「現代日本文化における伝統と変容」が進行している。このシンポジウムでは人間生活の、衣、食、住、言語、習慣など諸々の範疇を、同時に様々な角度から切断する方法を取ることになっている。

今回のテーマは「暮らしの美意識」である。現代日本文化を美意識の観点

集 報

から切断し、その伝統と変容の構造を明確にしようとするものである。

シンポジウム委員会

杉田 繁治	国立民族学博物館第五研究部助教授
(委員長)	
守屋 毅	国立民族学博物館第一研究部助教授
中牧 弘允	国立民族学博物館第一研究部助手
森田 恒之	国立民族学博物館第五研究部助教授
渡瀬 勉	国立民族学博物館管理部庶務課共同利用係
河合 昌子	「伝統と変容」事務局

参加者

報告者

石毛 直道	国立民族学博物館
稲垣 吉彦	NHK 総合放送文化研究所
井上 章一	京都大学
井上 忠司	甲南大学(国立民族学博物館客員教官)
梅棹 忠夫	国立民族学博物館
熊倉 功夫	筑波大学
栗田 靖之	国立民族学博物館
杉田 繁治	国立民族学博物館
祖父江孝男	国立民族学博物館
高田 康孝	愛知学泉大学
土屋 信一	国立国語研究所
津金沢聡広	関西学院大学
鳴海 邦碩	大阪大学
深作 光貞	奈良女子大学
森田 恒之	国立民族学博物館
柳 洋子	文化女子大学
山口 昌伴	GK 研究所

討論参加者

煎本 孝	国立民族学博物館
大塚 和義	国立民族学博物館
大森 康宏	国立民族学博物館
加藤 九祚	国立民族学博物館

孝本 貢	明治大学
佐藤 信行	広島大学(国立民族学博物館客員教官)
大丸 弘	国立民族学博物館
谷 泰	京都大学(国立民族学博物館客員教官)
中牧 弘允	国立民族学博物館
藤井 知昭	国立民族学博物館
守屋 毅	国立民族学博物館

日 程

2月8日(火)

10:30 司会: 祖父江孝男  
挨拶にかえて 梅棹 忠夫  
問題提起: 伝統と変容のモデル 杉田 繁治

13:15 司会: 守屋 毅  
(礼儀)  
作法書からみた近代の作法 熊倉 功夫  
茶の間文化論  
一日常作法にみる美意識の変遷一 井上 忠司

15:30 司会: 大森 康宏  
(住居)  
「桂」と「日光」の神話論  
——住居と建築をめぐる  
美意識のゆくえ—— 井上 章一  
町並みの美意識 鳴海 邦碩

2月9日(水)

10:00 司会: 井上 忠司  
(衣服)  
下着における変遷と美意識 深作 光貞  
衣服美の変容過程  
——“モノ”から“もの”へ—— 柳 洋子

13:15 司会: 森田 恒之  
(言語)  
人称代名詞と呼びかけの言葉 土屋 信一

日常会話から 稲垣 吉彦

15:30 司会: 中牧 弘允  
(食事)

食卓の変化 石毛 直道  
柳田国男「酒の飲みやうの変遷」—その後  
高田 康孝

2月10日(木)

10:00 司会:石毛 直道

(用具)

暮らしの美意識・生活用具 山口 昌伴  
ものどものイメージ結合 栗田 靖之

13:15 司会:杉田 繁治

(情報)

新聞の紙面構成に見る美意識の変容  
——とくに戦後を対象として——

森田 恒之  
メディアの社会史と「暮らしの美意識」  
津金沢聡広

15:30 司会:祖父江孝男

総括 祖父江孝男  
討論

◎「近代世界における日本文明」

日時 昭和58年2月28日(月)

—3月7日(月)

場所 国立民族学博物館, 東洋紡績総合研  
究所求是荘

摘要 本シンポジウムは, 民族学と不即不  
離の関係で文明学確立のための国際的  
かつ学際的な共同討議の場をつくらう  
とするものである。

この新しい分野にたちむかうとき,  
われわれは視点をつねに世界文明にお  
きながら, 日本文明と世界の諸文明を  
比較する「比較文明論」の手法を採用  
したい。世界文明のなかにおける日本  
文明の位置づけというような論点にも  
ようやく関心があつまりつつある。日  
本文明を普遍的な文明として, 世界の  
諸文明との比較をする視点の模索がは  
じまっている。

本シンポジウムに海外から招く研究  
者は, 欧米における指導的な日本学者  
たちである。

今回は, その第一回目のところもと

して, 生活, 社会, 宗教, 芸能をとり  
あげ, それぞれの分析により比較文明  
論の枠組となりうるモデルの提示を求  
め, 当面の課題にせまる第一歩を刻し  
たい。

組織委員会

委員長

梅棹 忠夫 国立民族学博物館長

委員

祖父江孝男 国立民族学博物館第一研  
究部長

佐々木高明 国立民族学博物館第二研  
究部長

伊藤 幹治 国立民族学博物館第三研  
究部長

加藤 九祚 国立民族学博物館第四研  
究部長

岩田 慶治 国立民族学博物館第五研  
究部長

J・クライナー ボン大学日本研究所所  
長

秦 明夫 国立民族学博物館管理部  
長

実行委員会

委員長

石毛 直道 国立民族学博物館第四研  
究部助教授

委員

守屋 毅 国立民族学博物館第一研  
究部助教授

栗田 靖之 国立民族学博物館第二研  
究部助教授

杉田 繁治 国立民族学博物館第五研  
究部助教授

小川 了 国立民族学博物館第三研  
究部助手

久保庭伊佐男 国立民族学博物館管理部  
庶務課長

湯浅 叡子 財団法人民族学振興会千  
里事務局長

宇治日出二郎 財団法人民族学振興会千



里事務局事業課長

参加者

Harumi BEFU Department of Anthropology Stanford University

Josef KREINER Japanologisches Seminar Universität Bonn

Sepp LINHART Institut für Japanologie Universität Wien

Robert J. SMITH Department of Anthropology Cornell University

石毛 直道 国立民族学博物館

梅棹 忠夫 国立民族学博物館

中牧 弘允 国立民族学博物館

守屋 毅 国立民族学博物館

横山 俊夫 京都大学人文科学研究所

日 程

2月28日(月) (千里阪急ホテル)

受 付

3月1日(火) (国立民族学博物館)

国立民族学博物館見学

開会式

基調講演：梅棹忠夫

3月2日(水) (国立民族学博物館)

セッション1：社会

3月3日(木) (国立民族学博物館)

セッション2：生活

3月4日(金)

京都観光

3月5日(土) (求是荘)

セッション3：宗教

3月6日(日) (求是荘)

セッション4：芸能

3月7日(月) (ホテル レークビワ)

総括討論

解 散

海外における研究・調査・収集活動

氏 名	官 職	出 発	帰 国	行 先
大丸 弘	助教授(第5研究部)	58. 1. 16	58. 3. 1	連合王国
周 達生	外国人 研究員(第1研究部)	58. 2. 9	58. 3. 2	中華人民共和国
長野 泰彦	助 手(第1研究部)	58. 2. 15	59. 2. 14	米国
栗田 靖之	助教授(第2研究部)	58. 2. 16	58. 2. 28	ブータン王国
垂水 稔	助教授(第5研究部)	58. 2. 25	58. 3. 3	香港
大森 康宏	助 手(第3研究部)	58. 3. 13	58. 3. 30	フランス
松澤 員子	助教授(第2研究部)	58. 3. 14	58. 3. 26	バングラデシュ
石毛 直道	助教授(第4研究部)	58. 3. 15	58. 3. 31	中華人民共和国, 香港
大塚 和義	助教授(第1研究部)	58. 3. 30	58. 4. 6	中華人民共和国

来館者抄

1月11日 浅居喜代治(大阪府立大学教授)

津村 俊弘(大阪府立大学教授)

13日 George F. MACDONALD (カナダ, カナダ国立人間博物館長)

石原 啓司(山口県立博物館副館長)

19日 宮本 又次(大阪大学名誉教授)

2月9日 船越 昭生(奈良女子大学教授)

14日 Luitjen H. BIERINGA (ニュージーランド, ニュージーランド国立美術館長)

Hiroko C. QUACKENBUSH (オーストラリア連邦, オーストラリア国立大学助教授)

21日 Jorge A. Flores OCHOA (ペルー)

- 共和国, クスコ大学教授)
- 3月1日 濱田 隆(奈良国立博物館長)
- 8日 Dunge-Yaichi DAGJIDYN (モン  
ゴル人民共和国, 科学アカデミ  
ー東洋研究所研究員, 東京外国  
語大学客員教授)
- 14日 今堀 誠二(広島女子大学長)
- 24日 中国政府文化官員代表団  
丁 谷(団 長)  
李 琼  
蔡 子 民  
崔 泰 山  
張 国 維  
刘 庆 齐  
彭 家 声

- 冯 柏 泉  
曹 国 兴  
穆 小 林
- 25日 Branislava SUSNIK (パラグアイ  
共和国, 国立民族学博物館長)
- 28日 中国黒龍江省社会科学院學術考  
察団  
李 劍 白(団 長)  
劉 民 声(副団長)  
李 哲  
張 育 勝  
王 紹 順  
曹 慶 運  
高 雲 山  
張 積 智

## 国立民族学博物館研究報告寄稿要項

1. 国立民族学博物館研究報告は、民族学（文化人類学）に関する論文、資料・研究ノート、調査研究活動報告等を掲載・発表することにより、民族学（文化人類学）の発展に寄与するものである。
2. 国立民族学博物館研究報告に寄稿することができる者は、次のとおりとする。
  - (1) 国立民族学博物館（以下「本館」という。）の教官（客員教授等を含む。）及び本館の組織、運営に関与する者
  - (2) 本館が受け入れた各種研究員及び研究協力者
  - (3) その他本館において適当と認めた者
3. 原稿を寄稿する場合は、論文、資料・研究ノート、調査研究活動報告等のうち、いずれであるかをその表紙に明記するものとする。なお、この区分についての最終的な調整は、国立民族学博物館研究報告編集委員会（以下「編集委員会」という。）において行う。（編集する場合は、原則として論文及び資料・研究ノートを1段組、その他のものを2段組として取り扱う。）
4. 原稿執筆における使用言語は、日本語、英語、フランス語、スペイン語、ロシア語、中国語及びドイツ語のうちいずれを用いても差し支えない。ただし、その他の言語を用いる場合は、編集委員会に相談するものとする。
5. 特殊な文字、記号、印刷方法等が必要な場合は、編集委員会に相談するものとする。
6. 寄稿する原稿が論文で、日本語を使用する場合は、原則として英文により500語程度の要旨を付けるものとし、その他の言語による論文の場合は、編集委員会に相談するものとする。なお、寄稿する原稿については、執筆者名のローマ字表記及び原稿表題の英文を付記しなければならない。
7. 寄稿する原稿の枚数は、原則として制限しない。ただし、編集する場合は編集委員会の判断により、紙数等の関係から分割して掲載することがある。
8. 寄稿する原稿は、必ず清書（欧文の場合はタイプ）し、原稿の写し1部を添付するものとする。なお、図、表のスマ入れ、レタリングは、編集委員会で処理する。
9. 寄稿された原稿は、審査委員会において審査のうえ、採否を決定する。なお、原稿は、採否にかかわらず原則として返却しない。
10. 稿料の支払い、掲載料の徴収は行わない。
11. 原稿の執筆に当っては、別に定める「国立民族学博物館研究報告執筆要領」による。
12. 原稿の寄稿先及び連絡先は、次のとおりとする。

〒565 大阪府吹田市千里 万博公園10-1

国立民族学博物館内

国立民族学博物館研究報告編集委員会（電話 代表 06-876-2151）

## 国立民族学博物館研究報告執筆要領

1. 原稿は、200字詰原稿用紙を使用し、横書きとする。
2. 原稿は、図、表を除き、原則として黒インクを使用する。
3. 日本語を使用して執筆する場合は、原則として当用漢字、現代かなづかいを用いる。
4. 句読点、括弧、各種記号等は、原則として原稿用紙のマス目1字分の扱いをする。
5. 原稿中の年号、月日及びその他の数字は、原則としてアラビア数字を用いる。なお、年号は、原則として西暦とする。
6. 図及び表は、一図、一表ごとに別紙に書き、本文とは別に一括して添付するものとする。なお、図、表ごとに通し番号（「図1」、「表1」等の要領により記入）、図、表名及び説明並びに出典等を記し、本文原稿の欄外には、それぞれのそう入箇所を指定するものとする。
7. 写真は、写りの明瞭なもので、手札判以上の大きさに焼き付けたものに限る。図及び表の扱いに準じて通し番号、説明を付けたうえ、そう入箇所を指定するものとする。ただし、カラー写真は、原則として受け付けない。
8. 本文又は脚注において文献を指示する場合は、カギ括弧を付け、著者名、文献刊行年次、引用ページ数の順に下記の例に従って記載する。

[柳田 1942: 67-69]

[Leach 1961: 123]

[柳田 1942: 67-69, 1944: 20-22; Leach 1961: 123]

ただし、同年次刊行物の場合は、アルファベット順により、下記のように記載するものとする。

[柳田 1942a: 20-22] [柳田 1942b: 10]

9. 脚注は、一つ一つ別紙に記し、通し番号を付ける。なお、本文中に脚注をそう入する箇所には、脚注の当該番号を記入し、別紙の脚注には、本文のページ数を明記するものとする。
10. 本文及び脚注において参照した文献は、すべて原稿の末尾にまとめて下記の方法により記入する。

- (1) 文献の配列は、著者名のアルファベット順とすること。
- (2) 文献の記載は、著者名、年号、論題(タイトル)、誌名、巻、号、出版社名の順とすること。欧文の雑誌名及び単行本名は、イタリック体にするため、原稿には下線を引くこと。また、ローマ字人名は、スモール・キャピタルとするため、二重下線を引き、日本語の場合は、論題にカギ括弧、雑誌名及び単行本名に二重のカギ括弧を付けること。雑誌の巻数及び号数は、原則としてアラビア数字を用いること。

(例)

論文の場合 (1)

石田英一郎

1948 「文化史的民族学成立の基本問題」『民族学研究』 13(4): 311-330.

Bohannan, P.

1973 Rethinking Culture: A Project for Current Anthropologist. Current Anthropology 14(4): 357-372.

論文の場合 (2)

杉浦 健一

1942 「民間信仰の話」 柳田国男編『日本民俗学研究』 岩波書店, pp. 117-143.

Leach, Edmund

- 1964 Anthropological Aspects of Language: Animal Categories and Verbal Abuse.  
In Eric H. Lennenberg (ed.), New Directions in the Study of Language,  
The M. I. T. Press, pp. 23-63.

単行本の場合

泉 靖一

- 1966 『文明をもった生物』 日本放送出版協会。

Murdock, George P. (ed.)

- 1960 Social Structure in Southeast Asia. Viking Fund Publications in Anthro-  
pology No. 29, Wenner-Gren Foundation for Anthropological Research, Inc.

翻訳書の場合

エリアーデ, M.

- 1974 『シャーマニズム——古代のエクスタシー技術——』 堀 一郎訳 冬樹社。

van Gennep, Arnold

- 1960 The Rites of Passage. M. B. Vizedom and G. L. Caffee, trans., The Uni-  
versity of Chicago Press.

国立民族学博物館研究報告 8 卷 2 号

〔監 修〕

梅 棹 忠 夫

〔編集委員長〕

加 藤 九 祚

〔編集委員〕

伊 東 一 郎

ケネス・ラドル

杉 村 棟

竹 村 卓 二

友 枝 啓 泰

垂 水 稔

長 野 泰 彦

藤 井 龍 彦

松 澤 員 子

和 田 正 平

---

昭和 58 年 8 月 31 日 発 行 非 売 品

国立民族学博物館研究報告 8 卷 2 号

編集・発行 国立民族学博物館  
〒565 吹田市千里万博公園 10-1  
TEL 06 (876) 2151 (代表)

印 刷 中西印刷株式会社  
〒602 京都市上京区下立売通小川東入  
TEL 075 (441) 3155 (代表)

---

Bulletin of the National Museum of Ethnology  
vol.8 no.2  
June 1983

- |  |   |
|--|---|
| <b>HATANAKA, Sachiko</b>                         | <b>Political Process in Stateless Societies of the New Guinea Highlands</b>   |
| <b>CHIBA, Tokuji</b><br><b>SAIGUSA, Yukihiro</b> | <b>Seasonal or Habitual Movement of Swidden Cultivators in the Uplands Surrounding Mt. Hakusan, Central Japan</b>       |
| <b>YOSHIDA, Shuji</b>                            | <b>Typology of Person Category in Deixis (II)<br/>—The Types of Person Category and It's Distribution in the World—</b> |
| <b>SHOJI, Hiroshi</b>                            | <b>Typology of Coordination in the Uralic Languages</b>   |
| <b>KOTANI, Yoshinobu</b>                         | <b>Problems of New World cultural origins as seen from Beringia</b>   |



National Museum  
of Ethnology

Senri Expo Park, Suita, Osaka, Japan  
phone 06-876-2151

ISSN 0385-180X